神戸女学院大学論集　第69巻第１号　Kobe College Studies Vol. 69 No. 1（June 2022）pp. 93-110

1910年代アメリカにおけるモンテッソーリ教育受容

― 英語版『モンテッソーリ・メソッド』の誕生とその影響 ―

米　津　美　香

The Initial Reception of the Montessori Method in the United States in the 1910's: The Birth and Influence of *The Montessori Method*

YONEZU Mika

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 非常勤講師、
奈良女子大学 研究院 人文科学系 助教
連絡先：米津美香　yonedu@bg8.so-net.ne.jp

要　旨

マリア・モンテッソーリ（Montessori, M. 1870-1952）の教育法に関しては、その成立以来、賛否両論の議論が展開されてきた。それはアメリカにおいても例外ではなく、1910年代には第１次モンテッソーリ教育運動が展開され、「自由」や「規律」を巡って様々な議論が巻き起こった。しかし、初期における熱心な受容とは裏腹に、1915年頃からモンテッソーリ・メソッドへの関心は急速に失われていった。モンテッソーリ・メソッドは、なぜ短期間にこのように相反する波を経験したのだろうか。その謎を解く一つの鍵は、1912年に刊行された英語版『モンテッソーリ・メソッド』（*The Montessori Method*）に見いだされる。英語版においては、イタリア語版にはなかった新たな２つの章が付け加えられるなど、そこには確かな変化が確認できる。この変更は何を意味し、後のモンテッソーリ教育研究にどのような影響を与えたのか。本論文では、1910年代アメリカにおけるモンテッソーリ教育受容について、1912年に刊行された英語版のテキストの誕生とその影響に着目しながら検討を試みる。

キーワード：モンテッソーリ教育運動、教育方法、『モンテッソーリ・メソッド』

Abstract

Since its establishment, arguments in favor of and against the Montessori Method have been proposed. The initial Montessori Movement was founded in the United States in the 1910s. Americans debated Montessori's doctrine of 'liberty' and 'discipline'. Despite the Americans' initial enthusiasm, they lost interest in the Montessori Method in approximately 1915. One may ask what gave rise and decline to the Montessori Method. The answers may be found in *The Montessori Method*, which was published in 1912. We can see certain changes in the English edition, such as the addition of two chapters. One may question why Montessori changed the text and what influence it had on subsequent research on the Montessori Method. In this paper, we examine the reception of Montessori Method in the United States in the 1910's focusing on the birth and influence of *The Montessori Method*.

Keywords: Montessori Movement, educational method, *The Montessori Method*

はじめに

イタリアの教育思想家・教育実践家であるマリア・モンテッソーリ（Montessori, M. 1870–1952）による「子どもの家」（Casa dei Bambini）での実践とその成果は、各国の教育関係者たちの関心を集め、モンテッソーリ教育は20世紀初頭に世界的なブームを巻き起こした。世界各国の中でもアメリカにおける反響は特に大きく、一方で厳しいモンテッソーリ教育批判も展開された。

例えば、1909年からモンテッソーリ教育を「幼児の教育における新しいメソッド」として継続的に紹介した『幼稚園―初等教育雑誌』（*The Kindergarten-Primary Magazine*）や1911年、1912年にモンテッソーリの仕事について、多くの写真を交えながら紹介した『マクルーア・マガジン』（*McClure's Magazine*）は、アメリカにおけるモンテッソーリ教育の知名度を押し上げた。さらに、モンテッソーリの教育が話題を呼ぶきっかけとなった彼女の主著『子どもの家の教育に適用された科学的教育学の方法』（*Il metodo della pedagogia scientifica applicato all'educazione infantile nelle case dei bambini*, 1909）の英語訳の出版をモンテッソーリに提案し、1912年４月刊行の英語版『モンテッソーリ・メソッド』（*The Montessori Method*, 1912）[1] に序文を寄せたハーバード大学のヘンリー・W・ホームズ（Holmes, H. W.）は、モンテッソーリについて、「モンテッソーリ博士の課題―幼児教育―に取り組み、彼女ほどそれに自らの経験や持ちうる力をつぎ込んだ女性はいない」［Holmes 1912: xviii］と述べ、彼女の教育法を無批判に自国の教育に適用することについては慎重にならなければならないとしつつも、障害児教育における知見を健常な子どもたちに適用しそれが実を結んだこと、謎解きの面白さを有した教具、書くことを教えるためのメソッド等を評価し、モンテッソーリ式のプログラムとフレーベル幼稚園のプログラムの接合の方途を探っている［cf. Holmes 1912: xvii-xlii］。一方で、当時コロンビア大学の助教授であったキルパトリック（Kilpatrick, W. H.）は、1914年刊行の『モンテッソーリ法の検討』（*The Montessori System Examined*）のなかで、モンテッソーリ教育は現在の教育理論の発展より遅れており、「自由の原理」やそこで行われる活動の多くは社会的側面を欠いているとの見解を述べ、モンテッソーリ教育を批判的に検討した［cf. Kilpatrick 1914］。

モンテッソーリ教育の各国での受容史をふり返るならば、上記で言及した1910年代アメリカのように、他国での紹介・受容にあたりモンテッソーリ教育はしばしば熱烈な称賛を浴び、あるいは痛烈な批判にさらされてきた。モンテッソーリ教育には、なぜこうした二分される評価がつきまとうのだろうか。本論文では、上記の問題に向き合うため、1910年代アメリカにおけるモンテッソーリ教育受容について、1912年に刊行された英語版のテキストの誕生とその影響に着目しつつ、アメリカにおけるモンテッソーリ・メソッドの紹介のされ方やモンテッソーリ教育に関する議論を精査し、二分される評価の内実を明らかにしていく。当時のアメリカの人々は、モンテッソーリ教育のどこに新しい息吹を感じ、何を取り入れようと試み、なぜ疑問を抱き拒絶したのか――上記の考察によって、当時のアメリカの幼児教育の特徴と課題につい

1）1912年初版の標題紙標題は以下の通りである。*The Montessori Method: Scientific Pedagogy as Applied to Child Education in "the Children's Houses" with Additions and Revisions by the Author*

ても明らかになるとともに、この〈モンテッソーリ教育とアメリカとの出会い〉の検討は、モンテッソーリ教育の特徴・課題・本質を浮き彫りにしうると考える。

1910年代アメリカにおけるモンテッソーリ教育の受容についての先行研究を概観するならば、ランブッシュ（Rambusch, N. M.）らによって先導された第２次モンテッソーリ教育運動の到来と呼応するように、1960年代頃から、第１次モンテッソーリ教育運動の興隆とその衰退の要因を歴史的に検証する試みが本格的に行われ始め［ex. Fugina 1963; Wills 1966］、1910年代初頭におけるモンテッソーリ教育の普及が、『幼稚園―初等教育雑誌』や『マクルーア・マガジン』など、専門誌や大衆紙の論文・紹介に支えられ、当時アメリカで主流であったフレーベル主義の幼児教育に対する問い直しという時流の中、アレクサンダー・グラハム・ベル（Bell, A. G.）夫妻、マーガレット・ウィルソン（Wilson, M.）、アン・E・ジョージ（George, A. E.）やアンナ・マッケローニ（Maccheroni, A.）、ヘレン・パーカースト（Parkhurst, H.）らの協力の下、モンテッソーリ教育運動が興隆したことが明らかにされてきた［cf. Appelbaum 1971; Kramer 1976; Hainstock 1978; Gutek 2016］[2)]。そして、1910年代のモンテッソーリ教育への関心は1915年をピークに衰退していくのであるが、その衰退の大きな要因はキルパトリックの批判によるものと位置づけられ、しばしば当時の進歩主義的なアメリカの幼児教育との相容れなさが指摘されてきた［cf. Campbell 1970; Lillard 1972］。

これまでの先行研究の成果は、モンテッソーリに関連する様々な資料の調査・研究、アメリカで展開された議論の検討によって、モンテッソーリ教育を取り巻く多様な人物や当時のアメリカの教育状況、受容する側とモンテッソーリのすれ違い等が第１次モンテッソーリ教育運動の隆盛と衰退を引き起こしたことを、われわれに指し示している[3)]。本論文では上記の先行研究の成果を踏まえ、第１次モンテッソーリ教育運動の隆盛とその衰退の核心により近づくため、内的な要因、つまり当時のモンテッソーリ自身あるいはモンテッソーリのテキストおよびモンテッソーリ教育の変化、そしてそれらと周囲の呼応関係に焦点を当て検討を行う。モンテッソーリのテキストの変遷を注意深く見るならば、モンテッソーリ自身が英語版への前書きで語ったように、英語版にはイタリア語版にはなかった新しい２つの章が加えられた。また、タイトルの変化、新たに章番号が付されたこと、写真の変更や英語版への前書き・序論の追加、記述内容の加筆修正など、1909年刊行のイタリア語版からは確かな変化が確認できる。アメリカにおける英語での最初のモンテッソーリのテキスト『モンテッソーリ・メソッド』の刊行と、加筆された新たな２つの章が、発刊後のモンテッソーリ教育研究の方向付けに大きな影響を与えたことは想像に難くない。また、加筆された文章の中には、イタリア語版刊行後の世界の反応を反映した記述、多くの新たな読者に読まれるであろう英語版に込めたモンテッソーリのあ

2）グテック（2016）は、1910年から1915年までのモンテッソーリと当時のアメリカのジャーナリズムの指揮者でもあり彼女のアメリカにおける広報でもあったマクルーアとの関係を精査し、第１次モンテッソーリ教育運動の支持者やモンテッソーリ教育を批判した人々双方が、1910年から1912年にかけてマクルーア誌上で紹介されたモンテッソーリのアイデアから多くの影響を受けたとしている［cf. Gutek 2016: xi］。

3）日本における先行研究には、キルパトリックのモンテッソーリ批判をプロジェクト法の形成過程との関連から捉え直した杉浦（2002）の研究、第１次モンテッソーリ教育運動の衰退原因をモンテッソーリ教育の「想像性」をめぐる議論とモンテッソーリ自身の思想展開から解き明かした山内（2002）の研究等がある。

る願いも垣間見える。変化したテキストと加筆された２つの章――そこでは何が語られ、アメリカの教育関係者はそれらにどのように呼応したのか。本論文では、英語版が刊行された1912年をひとつの参照点としながら、1910年代アメリカにおけるモンテッソーリ教育受容について検討を試みる。

１．初期の紹介と第１次モンテッソーリ教育運動

まずはじめに『幼稚園―初等教育雑誌』に紹介された内容を確認したい。クレーマー（1976）によれば、アメリカの出版界において初めてモンテッソーリが紹介されたのは、1909年12月刊行の『幼稚園―初等教育雑誌』においてであった［cf. Kramer 1978（1976）: 150］。この雑誌の編集者でもあったメリル（Merrill, J. B.）は「新しい幼児教育の方法」というタイトルの記事の中で、モンテッソーリについて次のように紹介している[4)]。「有能な医師であるマリア・モンテッソーリ医学博士、ローマ大学教授は近年、幼稚園のメソッドを刷新しており、この記事のタイトル（「新しい幼児教育の方法」）で取り上げるにふさわしい人物であろう」［Merrill 1909: 106　（　）は引用者による］。

メリルは、自身の記事の中でも言及しているように、「イタリアで開始された幼児教育の新しい方法」について紹介した1909年９月の『ロンドン教育誌』の記事と、イタリアにおけるモンテッソーリの支援者でありイタリア語版『子どもの家の教育に適用された科学的教育学の方法』の発刊を大きく後押ししたフランケッティ男爵夫人から、モンテッソーリ教育の情報を得つつ、この記事を執筆している［cf. Ibid.］。そしてメリルは、『ロンドン教育誌』の文章を引用しながら、モンテッソーリ教育とフレーベル主義の幼稚園の共通点・相違点について、次のようにまとめている。つまり、モンテッソーリ教育にはフレーベル主義と共通する「自由」の原理と、目を見張る子どもの自発的表現を自由に発展させることを重視している点に特徴があるが、一方、教師の役割に注目するならば、フレーベル主義の幼稚園では教師が「積極的役割を担う」のに対し、モンテッソーリ教育では教師は「科学的な観察者」となり、そのため教師の役割は「教授する」（instruct）というよりはむしろ「導く」（direct）ことになると位置づけた［Merrill 1909: 106-107］。また、モンテッソーリ教育における特徴的な「環境」や教育方法として、子どもサイズの家具や「日常生活の練習」等が紹介された。さらに、メリルはこの記事の最後で、フランケッティ男爵夫人は、モンテッソーリの仕事を完全に理解するためには実際にその教育を見てみる必要があると述べていることについて言及し［Merrill 1909: 107］、未知の教育の価値について考えるときには、実際の実践の様子に触れる必要があることを示唆している。

次に、『マクルーア・マガジン』における紹介を見ていこう。モンテッソーリ自身が英語版『モンテッソーリ・メソッド』の「英語版への前書き」の中で、「『世界の仕事』と『マクルーア・マガジン』の紙面で私の教育法を取り上げてくれたおかげで、モンテッソーリ・メソッドはイギリスとアメリカで大きな話題となり、実際、既に多くのアメリカの人々がローマを訪れ、私の小さな学校でこの方法がどのように実践されているのかを観察していった」［Montessori 1912: viii］と述べているように、多くの写真を交えながらモンテッソーリ・メソッドの特徴を

4）メリルは、1909年12月の最初の紹介から1912年９月までに、計７つの記事を『幼稚園―初等教育雑誌』に寄せた。

紹介した『マクルーア・マガジン』の記事は、アメリカの読者の関心を引き付け、第１次モンテッソーリ教育運動推進の一つの要因となった。

『マクルーア・マガジン』におけるモンテッソーリの最初の紹介者であるトジール（Tozier, J.）は、「教育的な奇跡を起こす人物―マリア・モンテッソーリの教育法―」（An Educational Wonder-Worker: The Methods of Maria Montessori, 1911）と題された記事の中で、モンテッソーリがイタールとセガンの影響を受けつつ、知的障害を持つ子どもたちに読み書きを教え「驚くべき成功」［Tozier 1911: 4］をおさめたことに言及したうえで、モンテッソーリの業績を次のように評価している。「マリア・モンテッソーリの輝かしい業績の中で最も素晴らしいのは、非常に幼い子どもたちの能力に最小限の負荷さえかけずに、最初に書き方、次に読み方を教えたことである。彼女の方法は、子どもたちがこうした能力を習得する通常の順序を逆にしていたのである」［Tozier 1911: 6］。モンテッソーリ・メソッドにおける特徴的な読み書きの教育法についての説明とともに、イタリア語版『子どもの家の教育に適用された科学的教育学の方法』の巻末に紹介されていた「口述される文章を黒板に書くモンテッソーリの生徒」の写真が紹介され[5]、その下にはイタリア語版にはなかった「４人のうちの平均的な子どもは、モンテッソーリ・メソッドによって６週間で書き方を学ぶ」という目をひく説明が付されている。その他、「「子どもの家」にはいたずらっ子はいない」という見出しで、モンテッソーリ教育における子どもたちが自己教育によって道徳性を発達させることについて言及し［Tozier 1911: 8］、従来の学校で適用されてきたような「見せかけの厳格さと不動性」（artificial rigidity and immobility）に基づいた規律ではなく、モンテッソーリのシステムでは「自由のための規律」（discipline for liberty）が目指され、達成されていると述べた［Tozier 1911: 10］。また、モンテッソーリ・メソッドにおける「日常生活の練習」についての紹介に加え、モンテッソーリによる「最も興味深く価値のある発見」の一つは、「沈黙の教育的価値」であると述べ、モンテッソーリ教育において実践され成功を収めている「静かごっこ」（game of silence）の方法と実態を紹介している［cf. Tozier 1911: 11-15］。そして、記事の最後には、次のような文章が掲載された。

> この記事の著者が小さな子どもたちにとっての貴重な恩恵についてはじめて知ったのは、あるアメリカ人、ラニエリ・ディ・ソルベッロ侯爵夫人を通してであり、彼女の邸宅にある託児所で、２人のたくましい男の子たちが、援助を受けつつ、就学する年よりも数年早く教育の道へと歩み始めるのを目撃した。彼らは遊び以外のことをしたとは気づいていなかったが、この２人（そのうち小さい子はまだ３歳半である）は、英語とイタリア語の両方で読み書きができる。［Tozier 1911: 19］

トジールの記事における目を引くタイトル、モンテッソーリ・メソッドが知的障害を持つ子どもたちにもたらした「驚くべき成功」の紹介、様々な「新しい」教育法・教具の写真、アメリ

5）トジールの記事には、計14枚の写真が説明書きとともに紹介された。14枚の写真のうち、イタリア語版の巻末に紹介されていたものが３枚使用されており（「口述される文章を黒板に書くモンテッソーリの生徒」「厚紙の筆記体で言葉を作っている様子」「敷石の上での、書くことの練習の実践の様子」）、またトジールの記事で紹介された14枚中３枚の写真（イタリア語版から援用された１枚を含む：「触れることによる読み書きの練習」「触れる感覚の練習」「厚紙の筆記体で言葉を作っている様子」）は、後の英語版『モンテッソーリ・メソッド』においても掲載されていることが確認できる。

カの子どもたちにもたらした「奇跡」の記述は、記事を読んだ人々の興味を引きつけ、モンテッソーリ・メソッドへのさらなる関心を喚起した。

以上見てきたように、専門誌や大衆紙に掲載された〈新しい〉教育についての、間接的情報源に基づく迅速な紹介記事は、モンテッソーリ・メソッドに対する期待を高め、アメリカにおけるモンテッソーリ教育受容を加速させる役割を担った。

2．英語版『モンテッソーリ・メソッド』の誕生と加筆された新たな2つの章

「はじめに」でも触れたように、1912年に刊行された英語版『モンテッソーリ・メソッド』には、モンテッソーリの手によって執筆され、大部分がフィッシャー（Fisher, D. C.）によって英訳された新たな2つの章が加えられた[6]。その他にも、イタリア語版にはなかった数多くの写真・イラストが追加され[7]（イタリア語版にあったいくつかの写真・イラストは削除された）、章番号が新たに付され文章のまとまりが分かりやすいものへと変化した。さらに、英語版刊行にあたって、イタリア語版では *Il metodo della pedagogia scientifica applicato all'educazione infantile nelle case dei bambini*（『子どもの家の教育に適用された科学的教育学の方法』）であったタイトルが *The Montessori Method*（『モンテッソーリ・メソッド』）へと変化した。これらは何を意味し、読み手に、そしてモンテッソーリ教育にどのような影響をもたらしたのだろうか。

第一に、英語版の写真・イラストに注目したい。ページをめくると、標題紙の前に1枚の写真（幾何学のはめ込み教具に触れながらレッスンを行うモンテッソーリと子どもの写真）が、そして本文中において16の項目に従って写真・イラストが紹介されている[8]。例えば、「ヴィア・ジュスティの学校の庭でのモンテッソーリ」と題された項目では、庭で教具を用いる子どもたちとモンテッソーリの姿が紹介された［cf. Montessori 1912: 144］。また例えば、「物が持つ性質の違いを教える教具」の項目に注目してみると、書き方を学ぶための教具の一揃いと触覚版、円柱差しの教具の写真とともに、教具に関する次のような短い紹介文が付されていることに気づく。

> （A）書き方練習用テーブルとはめ込み教具　　（B）木製の板の触覚版
> これらの教具は、表面をなめらか／ざらざらにするために、一部がサンドペーパーで覆われている。
> （C）円柱差し
> この教具に自分で取り組むことによって、子どもは、物体を太さ・高さ・大きさに従って識別することができるようになる。　［Montessori 1912: 190］

これらの写真には ‘Copyright, 1912, by Carl R. Byoir’ という文字が付されており、イタリアにも訪れモンテッソーリ教育を学んだアメリカのカール・R・ビョワール（Byoir, C. R.）による

6）他の章は主にアン・E・ジョージによってイタリア語から英語に翻訳された。
7）英語版の冒頭には、教具のイラストの使用に関して、ニューヨークの The House of Childhood 社に対する、出版社による謝辞が掲載されている［cf. Montessori 1912: vi］。
8）16の項目に従って紹介されている写真・イラストのうち、イタリア語版から継続して掲載されている写真は2点確認でき、その他の写真・イラストはイタリア語版とは異なるものが用いられている。

写真が用いられていることが確認できる。ビョワールの写真は多くの教具の紹介に際して用いられ、全16項目中７項目で使用されている。また、イタリア語版では巻末にまとめて紹介文のない写真・イラストも多く掲載されていたが、それらに代わり、英語版では本文の内容に従って、写真・イラストと説明書き（教具の特徴や子どもが何を身につけるか等）がモンテッソーリ・メソッドについての理解を助けるべく配置されており、読者を意識した変化が見て取れる。

さらに、モンテッソーリ学校についても、先述したヴィア・ジュスティの学校の他に、ローマのフランシスコ会の修道女のための修道院学校、そしてニューヨークのタリータウンにあるモンテッソーリ学校の様子が紹介されており、それらの写真の広がりは、モンテッソーリが1909年時点で一つの「覚え書き」［Montessori 1909: 5＝1912 : 1］として書き記した『（イタリアにおける）子どもの家の教育に適用された科学的教育学の方法』［（　）は引用者による］というある種限定されたものから、数年の時を経て、メソッドが、イタリア以外の国でも実践されうる『（様々な国における）モンテッソーリ学校の教育に適用された科学的教育学の方法』［（　）は引用者による］という普遍的な意味合いを帯びるようになったことを暗示している。そして、イタリアの「子どもの家」での子どもの観察と実験の結果を記した彼女の一つの「覚え書き」は、英語版のタイトル（『モンテッソーリ・メソッド』）と相まって、様々な国で適用可能であるとの期待を付与された「モンテッソーリ・メソッド」という一つの教育法として人々の前に提示されたのであった。それは、単なる翻訳書の発刊という意味合いを超えて、アメリカという一種のフィルターを通した新たなモンテッソーリ教育の１ページとなったのである。

第二に、加筆された２つの章についての考察を進めよう。モンテッソーリは、英語版の翻訳を刊行するにあたり、新たな章を設けたことについて「英語版への前書き」の中で次のように述べている。

> イタリア語版が刊行されてから英語版が刊行されるまでの間に、私は子どもたちと共に、教育法の実践的な部分の詳細のいくつかを平易なものにしたり、より正確なものにしたり、規律に関する追加の観察記録を集める機会があった。その結果、この方法が有効で、広範囲にわたる科学的協同が必要であることが示されたため、そのことを新しい２つの章としてアメリカ版に具現化し、表現している。［Montessori 1912: vii-viii］

この「新しい２つの章」には「第20章　練習の順序」（Sequence of Exercises）「第21章　規律の一般的考察」（General Review of Discipline）という章題がつけられ、〈モンテッソーリ教育における種々の練習をいかに組み合わせつつ子どもに段階的に提示していくか〉という問題と、「子どもの家」に見られる驚くべき「規律」の特徴が示された。モンテッソーリは、アメリカ・イギリスの雑誌上でその教育法が紹介された後、多くの人々がモンテッソーリ教育に関心を抱き、ローマの学校を観察しに訪れたことについて、「この動きに勇気を得た私が希望を表明してよければ、私は将来、私のローマでの仕事が、効果的で有益な協同の中心となることを望みたい」［Montessori 1912: viii］と述べ、イタリアの「子どもの家」から始まり、２つの章を加えた英語版においてさらに発展したモンテッソーリ教育が世界の人々に伝わり、そこから科学的探究、協同の輪が広がっていくことに期待を寄せている。

上記を踏まえつつ、第20章「練習の順序」の内容について詳しく見ていこう。モンテッソーリは、この章の冒頭において、「われわれのメソッドの実際的な適用にあたっては、子どもに連続的に与えられるべき練習の順序や様々な一連の組み合わせ方を知ることは有益であろう」［Montessori 1912: 338］と述べ、第１段階から第５段階までの、それぞれの段階における教具の提示や練習の順序を詳しく解説している。例えば、第１段階では椅子を音をたてずに動かす実際生活の練習、ひも結び、ボタンかけ、ホック留め、シリンダーの練習（感覚練習）等が挙げられ、さらにシリンダーの練習における適切な順序（ａ それぞれ同じ高さで直径が小さくなっていくシリンダー、ｂ 大きさの全てが小さくなっていくシリンダー、ｃ 高さだけが低くなっていくシリンダー）が示されている［Montessori 1912: 338-339］。

イタリア語版においても「実際生活の練習」、「感覚教育」などのまとまりごとに、練習のための順序は示されていたが、英語版では、それぞれの練習・教育が組み合わされ、提示されるべき段階に従って具体的に説明がなされた。この変化に注目するならば、モンテッソーリ自身が「メソッドの実際的な適用」［Montessori 1912: 338］という言葉を用いたように、それまでばらばらに説明されていたそれぞれの練習の順序・方法を、実際に各自の学校で子どもたちに適用する際のひとつの指針とすべく、新たな１つの章が書き記されたと考えることができる。また、彼女が「「子どもの家」では、われわれは非常に様々な練習を同時に始めており、教具をそっくりそのまま提示する際には段階が存在することが明らかになった。これらの「段階」は、初版以来「子どもの家」での経験を通して明確に定められてきた」［Ibid.］と述べているように、それらは「子どもの家」での実践と子どもの観察から導き出され、修正を加えながら綿密に構成されたひとつのモデルケースであるとともに、実際に適用する際の手引き、といった意味合いを帯びている。モンテッソーリは、最終の第５段階の子どもたちは、最も興味深い発達を見せると述べ、この章を次のように締めくくっている。

> 彼らは教えを受けるためにほとんど走ってきて、注目すべき方法で自身の知的成長を整える。
>
> この喜ばしい成長は、われわれが大変嬉しく思うものであり、われわれは子どもたちの中に、自身の深い法則に従って精神的成長を遂げる人間性をみるのである。試みてみる者だけが、こうした、種をまくことから収穫を得ることがいかに素晴らしいかを語ることができる。［Montessori 1912: 345］

上記の文章は、これから実践を試みる者への一種のエールとも読み取れる。1910年代初頭のアメリカにおいては、モンテッソーリ・メソッドの積極的受容とアメリカの教育への適用の試みが展開されたが、モンテッソーリ自身のテキストの変化も、モンテッソーリ教育運動の基盤の一部を形成していたのである。モンテッソーリ・メソッドにおける驚くべき子どもの変化とそれを達成するためのアプローチは、次の章でも詳細に示されている。

続く第21章「規律の一般的考察」では、モンテッソーリ教育における特徴的な「規律」の諸相と、「規律」と諸々の練習との関係性についての考察がなされている。モンテッソーリは、この章を新たに英語版に加えた理由について、次のように述べている。

イタリア語版の刊行以来、われわれが蓄積してきた経験のおかげで、40人から50人にさえなるわれわれの小さな子どもたちのクラスで、規律が普通の学校におけるそれよりもはるかに良いことが度重ね明らかになった。それゆえ、私の方法―自由に基礎を置いた方法―によって獲得された規律の分析が、アメリカの読者の関心を引くかもしれないと私は考えた。［Montessori 1912: 346］

モンテッソーリは「子どもの家」への訪問者たちが、活動への没頭を示す子どもたちを「小さな大人たち」「熟慮している裁判官」［Montessori 1912: 347］と呼んだことについて言及しつつ「規律」の諸相を明らかにしている。これらの記述から、モンテッソーリが「子どもの家」にみられる「規律」が他の学校にはみられない特徴的なものであると周囲の反響からも再認識し、アメリカの読者に向けて詳細を書き記したことが分かる。また、モンテッソーリは、しばしば参観者を感動させる「子どもの家」の子どもたちの慎み深く他者への配慮に満ちた食事の光景について、それらは「命令や説教、端的に言って一般的に知られているしつけのための工夫」によっては決して獲得されえず、「その子どもたちの振る舞いが規律ある状態に整えられ、彼らの生命そのものが深められ拡張された」結果によるものであると述べている［Montessori 1912: 349］。モンテッソーリ教育における「規律」は、教師によって外的にもたらされるものではなく「それぞれの子どもの内的生命の中に起きる一種の奇跡」［Ibid.］のようなものであった。それでは、どのようなきっかけでこの内的な規律が生じるのだろうか。モンテッソーリは、「真の規律の曙光は作業を通してあらわれる」［Montessori 1912: 349］と述べ、自発的な作業の中で活動性を発達させることによって自己規律が達成されると主張している。また、モンテッソーリ教育における「内的規律」と「作業」は互いに影響しあうものであり、「規律の獲得」は作業の終着点や目的ではない。それらの関係は、作業が子どもを精神的に発達させ、精神的発達を遂げた子どもはより良く作業を行い、進歩した作業がまた彼を楽しませる、といった具合に螺旋状に進んでいくものとして位置づけられている［cf. Montessori 1912: 353］。それゆえモンテッソーリは「規律」を、「一つの事実ではなく道である」［Ibid.］と称するのである。そして、これらの「真の規律の曙光」は、子どもたちの自発的な自己発達の自然な方法を理解することを可能にした「自由」の原理に支えられている［Montessori 1912: 357］。一連の「規律」についての考察は、次のように締めくくられた。

これらは、間接的規律の一つの形式を示す最初の実験の輪郭である。そこでは、批判的で小言を言う教師に、子どものための作業と自由の合理的な組織がとってかわられている。［…］それは全ての市民的進歩の２つの道である作業と自由の上に打ち立てられている。［Montessori 1912: 370］

モンテッソーリ教育において達成される「規律」とは、一般的に考えられているような、外的に従わせ達成される規律ではなく、モンテッソーリ教育の中核をなす原理である「作業と自由」によって子ども自身の内面から達成される、自己規律の表出を意味していることを、モンテッソーリは新たな章で強調したのであった。「規律」に関する章は1909年刊行のイタリア語版においても既に設けられていた（「第５章　規律」）が、モンテッソーリは、アメリカの教育関係

者を含め様々な人々によって関心が寄せられ、他の教育には見られない特徴的なものとして再認識した「規律」の原理について、追加の観察記録を集めつつ詳細な説明を加え、アメリカの読者に再提示したのであった[9)]。そして実際にこの「規律」の原理は、キルパトリックをはじめとするアメリカの教育関係者たちのさらなる関心と議論を呼び起こした。

最後に、イタリア語版には存在しなかった、ホームズの序文についても検討しておきたい。ホームズは、先述したようにモンテッソーリに英語訳の出版を提案した人物であり、当時ハーバード大学の教授を務めていた。ホームズはモンテッソーリ教育を次のように評価する。「女性の心と手によって考え出され、始められた教育システムは、その体系的な全体性と実際の応用において間違いなく独創的で、他に類例がない」[Holmes 1912: viii]。そして、モンテッソーリのシステムが「子どもたちのための自由という斬新な概念」に基づいており、「感覚、運動および精神的能力を鍛える個別の、高度に正式な訓練」を伴い、「読み・書き・算の能力を迅速かつ簡単にしっかりと習得する」[Ibid.] ことに繋がるシステムであると評している。一方で、ホームズはモンテッソーリ・メソッドの他国の教育への適用可能性について、「このシステムは決して幼児教育の全ての問題を解決することはできない」とし、「いくつかはおそらくイギリスとアメリカの学校では使用できない」[Holmes 1912: xix] と慎重な姿勢を見せている。そして、次のように述べ、モンテッソーリの教育とフレーベルの教育を接合させる新たな幼児教育プログラムの形を模索している。

> 彼女は、システムがまだ完成していないことを明言している。実用のためには、私たちの学校で最終的に採用されるシステムは、モンテッソーリ式プログラムの要素と幼稚園プログラムの要素、つまり「進歩的」(liberal)と「保守的」(conservative) の両方を組み合わせる可能性が非常に高い。 [Holmes 1912: xix-xx]

このホームズの試みは、モンテッソーリの英語版への前書きにおける「広範な科学的共同作業」[Montessori 1912: viii] の呼びかけとも呼応するものであった。ホームズは、序文の中でモンテッソーリ式プログラムと他のプログラムとの間の原則の違いを明らかにし、それらの実行可能な組み合わせの一つを提示した。ホームズの論の中では、モンテッソーリの教育とフレーベルの教育は、対立するものとは捉えられておらず [cf. Holmes 1912: xxv]、また、社会的条件の違いにも慎重に注意が払われている [cf. Holmes 1912: xxvii]。このホームズの視点は、モンテッソーリ・メソッドの新規性・有用性にのみ目を向け盲目的に受容するのでもなく、自国では実現不可能であると拒絶するのでもなく、自国の教育風土を踏まえた上で従来の教育との融合の道を探る、モンテッソーリ・メソッドとの〈アメリカ式の〉接合を意味していた。1910年代初頭の熱狂的な注目と紹介を経て、ホームズによって新たなモンテッソーリ教育受容の道が開かれたといえる。そして、この序文は、先述したような〈広くアメリカの読者を想定してより理解しやすく編まれた〉という英語版の特徴と混じり合いながら、モンテッソーリ教育を詳細に検証し、〈アメリカの教育〉へと向けて開いていく土壌を形成した。

9) 第21章は、モンテッソーリ教育と周囲の反応の往還によって生成された章ともいえるだろう。

3．英語版『モンテッソーリ・メソッド』刊行後――キルパトリックによる批判

1912年に英語版が刊行され、モンテッソーリ・メソッドに対する賛否両論の意見や研究の成果が報告された[10)]。中でも、当時アメリカの教育界をにおいて頭角を現しつつあったキルパトリックによる一連のモンテッソーリ教育批判は、多くのアメリカの人々の目にするところとなった。キルパトリックは1913年２月の国際幼稚園連盟における講演「モンテッソーリとフレーベル」（Montessori and Froebel）、1914年に刊行された『モンテッソーリ法の検討』（*The Montessori System Examined*）の中で、体系的なモンテッソーリ教育批判を展開した。キルパトリックは、1913年の講演を行う以前に、イタリアに訪れ、モンテッソーリと面会するとともに、諸学校の見学を行っている。そこでの出会いとはいかなるものだったのだろうか。

ビーネク（1998）によると、キルパトリックは、イタリアにおける調査旅行に出かける前、1912年４月、地下鉄で５番街に赴き、モンテッソーリ教具を50ドルで購入し、イタリア旅行に赴く前にモンテッソーリの著作に目を通している［Beineke 1998: 66-67］。また、自身の日記の中で、モンテッソーリ教育の自由の概念については反対しないが、感覚訓練に対しては部分的に受け容れがたいとし、「モンテッソーリ・メソッドはアメリカにおいては同じように適用できないとしか思えない」［Kilpatrick 1912a］と綴っている。そして1912年６月４日、キルパトリックはモンテッソーリに面会し、教具や形式陶冶について等、いくつか質問を行った［Beineke 1998: 69］。その後、ヴィア・ジュスティの学校やベニ・スタビレの「子どもの家」を訪問し［Beineke 1998: 70］、学校における子どもたちが好きなことをしているが、騒ぐことを許されていない状態を「放縦なき自由」（liberty without licence）と６月12日の日記に書き記し、賛辞を贈っている［Kilpatrick 1912b］。帰国後、キルパトリックはこのイタリア訪問を踏まえ、ティーチャーズカレッジのホーレスマン講堂でモンテッソーリ・メソッドについての批評を述べ［Beineke 1998: 70］、さらに、1913年の国際幼稚園連盟における講演「モンテッソーリとフレーベル」において７つの項目に従い、具体的な議論を展開した。

キルパトリックは、1913年の講演の中で、フレーベル幼稚園との比較を交えながら、「モンテッソーリ・システムには、アメリカの幼稚園の年齢の子どもたちの教育に何か役立つものがあるだろうか」［Kilpatrick 1913: 491］という問題について考察を進めている。ここで議論されたのは、次の７点であった。(1)教育の科学的研究に対する２人の全般的態度　(2)子どもの人格の発達と自由の原理（doctrine of the liberty）　(3) ２つのシステムにおける自己表現の妥当性

10）例えば、ヘイルマン（1912）は、モンテッソーリ学校の子どもには社会性や想像性を育む機会が与えられていないとの批判を展開し［cf. Hailmann 1912］、ベール（1913）は「子どもの家」における家庭と学校の関係性を評価した［cf. Berle 1913］。また、モンテッソーリ・メソッドとアメリカの教育法とを比較し、実際に実践を行ったうえで「自然で無理やりではない形の」アメリカの教育への適用を模索する試みも展開された［cf. Ward 1913］。

1913年12月８日、モンテッソーリはアメリカのカーネギーホールにて自身の教育法についての講演を行った。聴衆は1000人以上、ホールいっぱいに集まり、数日後に２回目の講演が予定されるほどの関心が示された。司会は当時幼稚園協会会長であったジョン・デューイがつとめた［New York Times 1913］。当時のアメリカにおけるモンテッソーリへの注目と期待が窺われる。モンテッソーリのテキストに関しては、1912年の英語版『モンテッソーリ・メソッド』に続いて、1914年５月に『私のハンドブック』（*Dr. Montessori's Own Handbook*）が出版された。この小冊子では、モンテッソーリ・メソッドの概略が示された。

(4)自己教育（auto-education）　(5)実際生活の活動の利用　(6)教具を用いた体系的訓練の原理　(7) 3 R's のための準備、である。キルパトリックは、以前より関心を抱いていたモンテッソーリの「自由の原理」について、フレーベルの教育[11]と比較しながら次のように述べている。

> 一方、モンテッソーリの言説は個人の自由を強調している。子どもは、利用できる教具の中からほとんど自由にそれを選び、それを用いて自由に活動を行う。詳細なプログラムは存在せず、教師は背後に控えている。多くの人々の予想に反して、これは無秩序をもたらさない。熱中、幸福感、他者への配慮、そして発達が結果として生じるのである。
>
> ［Ibid.］

キルパトリックはここで、モンテッソーリの「自由の原理」を評価しつつも、「私の判断では、ここに子どもの自由に関する満足のいく道筋は全く見られない」［Kilpatrick 1913: 491-492］と述べ、モンテッソーリの学校の子どもたちが、多くの強制や教師による指示がない中でも、無秩序に至らないその原理に疑問を抱いている。キルパトリックは、「子どもの人格の発達と自由の原理」は、①個人の選択と自発性、②グループにおける協同、③社会の要請への適合によって達成されると捉えていた［Kilpatrick 1913: 492］。それ故、グループ活動等によらず、人格の発達や社会的要請への適合を達成しているモンテッソーリ教育は彼の目には一種異質なものとして映ったのであった。しかし、キルパトリックは、子どもの「自由」を保障するモンテッソーリ・メソッドの原理について、その方途については理解しがたいとしながらも、モンテッソーリの学校において実際に達成されている子どもの「自由」については、イタリアにおける視察の際と同様に、称賛の意を示している。キルパトリックは、「(2)子どもの人格の発達と自由の原理」のセクションを、次のように締めくくっている。

> 実行できる真の自由のプログラムはとても難しい問題であるが、モンテッソーリの学校は、少なくとも幼児期においてはこの様なプログラムは実行できると説明している。もしそうならば、モンテッソーリの学校は、われわれの幼稚園や小学校のほとんどに、はっきりとした挑戦状を突きつけていることを認めることになる。この状況はとても重大である。この呼びかけに注意を払うことができない、あるいはしようとしない幼稚園は悲運の道をたどるだろう。子どもたちは、真の選択と自己統制を練習する機会を与えられなければならない。
>
> ［Kilpatrick 1913: 492-493］

キルパトリックがフレーベルの教育、モンテッソーリの教育、そして当時アメリカで行われていた幼児教育を比較しつつ探究したのは、何が自己規律・人格の発達を生じさせるかという、教育学において繰り返し問われてきた問題であった。彼は、上記の問題意識を継続しつつ、モンテッソーリの「自由の原理」と「自己教育」についての批判的考察を、『モンテッソーリ法の検討』において、より鋭く示すこととなる。

キルパトリックによる『モンテッソーリ法の検討』は、1914年にアメリカで刊行された。モ

11）キルパトリックは、フレーベルの「自由の原理」について、「教師の詳細なプログラムに合致する限り、子どもはそれに応じて自由を獲得できる」としている［cf. Kilpatrick 1913: 491］。

ンテッソーリ・メソッドへの関心は、当時のアメリカにおいて引き続き継続されており、「子どもの家」をモデルにした学校がアメリカの様々な地域に創設されたという［cf. Suzzallo 1914: vii］。キルパトリック自身が「はしがき」で示したように、『モンテッソーリ法の検討』は、第一に「その諸原理相互の関係と他の教育学者によって主張された同じ原理との関係を明らかにするために」、第二に「モンテッソーリ博士がアメリカの教育にどのような影響を与えうるかを確かめるために」、できるだけ全般的に検討していくことが目的とされた［cf. Kilpatrick 1914: iii］[12)]。また、「編者はしがき」にあるように、この著作が「理論家や実践家」に向けてというよりはむしろ「公立学校の教師や校長」を対象に述べられていること、そのため「細かい事柄」や「特定の実践の効果」［Suzzallo 1914: viii-ix］が問題にされている点にも注意を向けておきたい。本書におけるキルパトリックの検討の多くは、当時のアメリカの教育における諸問題にモンテッソーリ・メソッドがいかなる示唆を与えうるか、アメリカにおいて行われている実践と比較した際にいかなる点が新しく、そしてアメリカの子どもたちに形を変えることなく使用できるかといった点に向けられ、モンテッソーリ・メソッドの有効性やアメリカの教育への適用可能性が厳しく吟味された。

キルパトリックは、以前より検討を試みていたモンテッソーリの「自由の原理」について、『モンテッソーリ法の検討』の中で、１つの章をさいて（第３章「自由の原理」）、さらに踏み込んだ議論を行っている。キルパトリックは、モンテッソーリを、ルソー、フレーベルらの思想の流れを受け継ぎ、子どもの内なる力を信じ「自由の原理」を教育に取り入れ、「学校の個々の子どもたちに大幅な自由を与える」教育方法を考え出した人物として位置づけている［Kilpatrick 1914: 13-14］。そして、従来の幼稚園の子どもが社会的要請への適合を主に「教師が優しく向ける社会的抑圧」を通して身につけるのに対し、モンテッソーリの学校では個々の子どもが著しく「自由の手綱」［Kilpatrick 1914: 16］を持っていると述べる。キルパトリックは、〈自由から無秩序が生じない〉という、1913年時点では容易に理解しがたかったモンテッソーリ教育の原理についての探究に端を発し、学校一般の諸活動における「自由」の問題（「子どもに自由な選択が許される理由」「自由な選択と協力の問題」「子どもが必要な知識や技能を習得する方途」「自由な選択と社会的要請への適合」）の考察に導かれている［Kilpatrick 1914: 17-26］。キルパトリックは、それらの考察の中で、「子どもの自然な衝動のかなり自由な表現」［Kilpatrick 1914: 25］を用いたモンテッソーリの教育方法に関して一定の評価を与え、彼女が実践の中で子どもに自由を保障しそれが有効に作用し、規律が保たれていることに賛辞を送りつつも、その自由に基づく教育の下では社会的協力体制づくりの場が十分に与えられていないとの批判を展開した［Kilpatrick 1914: 20］。

以前より疑問が呈されており、そして『モンテッソーリ法の検討』においては明確に示されたこの批判は何を意味するのだろうか。この批判の背景には、モンテッソーリとキルパトリックの「教育」についての考え方の違い（発達観―教育観の違い）が存している。それ故、彼の批判が何を意味するかを考察することは、キルパトリックとモンテッソーリ、それぞれの立場――発達観と教育観を明らかにすることにも繋がるだろう。キルパトリックは、モンテッソー

12）キルパトリックが『モンテッソーリ法の検討』の中でその文章を度々引用しているように［cf. Kilpatrick 1914: 4, 9, 13-14, etc.］、彼のモンテッソーリ・メソッドの検討は主に英語版『モンテッソーリ・メソッド』に基づきなされている。

リが「発達を子どもの内面に潜んでいるものの展開である」と考えていることに対して否定的な立場を取り、こうした捉え方は古いものであり、「人間の教育の場合には不十分である」［Kilpatrick 1914: 7-11］と否定している。モンテッソーリの「自由の原理」に関するキルパトリックの批判は、モンテッソーリの学校で実際に行われているメソッドにおける「自由の原理」（例えば、選択の自由、区切られない時間など）には向けられてはおらず、むしろ〈潜在的な発達可能性を有した子どもを想定し、それを十全に発達させるための手段として「自由」を措定する〉というモンテッソーリの発達観と教育方法の結びつきに向けられている。キルパトリックがそう考える理由もまた、彼の発達観―教育観から納得いく形で理解される。彼は、「教育は子どもの内面からの発達として考えられなければならない」という原理を「古い考え」として退け、個人の発達は環境との相互作用によって達成されるものであると考えている［cf. Kilpatrick 1914: 8］。そうした発達観を持つ彼にとって、「教育」は「生きること」であり、「教育には、現実の生き生きとした状況との直接的な接触が想定」［Kilpatrick 1914: 60］されなければならならない――そう考える彼の目には教育を生命の援助ととらえ、内的生命の目覚めと発展を重視するモンテッソーリ教育は社会性的側面を欠くものとして映ったのであった。

彼は、1913年時点においてその輪郭を描いていた〈いかにして社会性や協力体制が確保されるのか〉という問題について、それらは「共通の行動の必要性を感じることから生じる共通の活動」におけるグループ作業によって解決されるもの［Kilpatrick 1914: 20］であり、子どもの人格の形成と他者への配慮は「ふつうの条件の下で、人々に入り交じることによってのみ」学ばれるもの、との見解を1914年の著作（『モンテッソーリ法の検討』）の中で示すこととなる［Kilpatrick 1914: 12］。また、この彼の考えは、キルパトリックが自身の著作の中でデューイの自由の原理を高く評価し［cf. Kilpatrick 1914: 12］、その思想を度々援用しているように、子どもの生活経験と協同を重視し、学校を「小さな社会」として捉えるデューイの影響を大きく受けている。キルパトリックの考える「自由」は、民主主義のそれに基礎づけられたものであり、そこでの教育の目標は「自分で自分を基礎づけること」――そのためには「決心や選択、責任に支配されるような生活それ自体」［Kilpatrick 1914: 18］に入り込む必要があるとされたのである。

一方、モンテッソーリの発達観―教育観について、モンテッソーリ自身のテキストに従って今一度確認しておくならば、本論文の第２章で考察したように、モンテッソーリにとって「規律」は外的に達成され得ず、常に間接的な手段―「自発的な作業のなかで活動性を発達させること」［Montessori 1912: 350］―によって達成されるものであった。そして、活動の自由を保障され作業によって精神的に発達し続ける子どもは、「嬉しさ・精神的目覚め・内なる宝の家を形成する喜び」を経験し、その宝の家に「正義の源泉となるであろう優しさと力」［Montessori 1912: 353］を蓄える。モンテッソーリ教育においては、教師からの指導等によって外的に与えられる受動的な規律ではなく、生活のある規則に従うことが必要であるような時、自分の行動を規制することができるような「活動的な規律」（disciplina attiva/ active discipline）［Montessori 1909: 63＝1912: 86］が重視される。一人ひとりがそのような規律を身につけると、それは集団にも敷衍され、教室全体の規律が保たれるという［cf. Montessori 1909: 68-69＝1912: 93-94］。これらの理論を支えているのは、子どもが、自らの力で障害を克服しようとする潜在的生命を有している［Montessori 1909: 76＝1912: 105］という彼女の発達観で

あり、それゆえ「教育」は子どもの幼少期の知的輝きの曙光を見過ごさぬよう尊重し、十分な発展に向けて環境を準備し助成する、生命の援助であると位置づけられたのであった。

これまでの考察で明らかになったように、キルパトリックとモンテッソーリの教育についての考え方の違いは、その出発点であるところの発達観の相違に起因している。そして、それらの相違は、キルパトリックがモンテッソーリの教育を「古い」あるいは「不十分」であるとみなす見方へと繋がった。また、もとを辿れば『モンテッソーリ法の検討』の目的の多くが、「アメリカで試みられる場合」[Kilpatrick 1914: 64] 何をもたらすか、「モンテッソーリ・メソッドという源から、よいものを借用する」[Kilpatrick 1914: 40] といったアメリカの教育への適用可能性・有用性に向けられていたことも、互いの相違を際立たせる記述の一因となっていたと考えられる。また、1912年の英語版『モンテッソーリ・メソッド』において施されたいくつかの変更（アメリカの読者を想定した「規律」についての考察の追加、実際的適用に資する教育方法の具体的提示、ホームズの序文）も、モンテッソーリは当時想定していなかったかもしれないが、キルパトリックの批判を引き起こす一つの呼び水になったとも考えられる。

こうした問題は、キルパトリックによるモンテッソーリ教育批判においてだけではなく、海外の新たな教育法を受容する際にしばしば生じうる問題であると考えられる。特に初期の受容においては、メソッドの新規性に注目がなされ、自国の教育課題にいかなる解決をもたらすか、あるいは取り入れ、有効に活用できる部分があるかが積極的に問われる場合が多い。それは、必ずしも不幸な結末を約束するとは限らない。対比によってメソッドの検討が深まったり、既存の教育を問い直す契機となったりすることもあれば、その土地や時代の風土・状況と編み合わさりながら、さらなる教育の発展をもたらすこともある。あるいは既存のメソッドとの融合でこれまでなかった教育法が誕生することもあるだろう。しかし、新たな教育法に有用性や適用可能性を強く見いだそうとする試みは、その教育を緩やかにつなげている結び目を、ばらばらにしてしまい全体を見えなくしてしまうかもしれない。有用性や適用可能性を探すその瞳は、まっすぐに無駄なく教育法の利用可能な部分を見つけ出すことができるが、しばしば教育法を目に見えない形で支えているおぼろげな構成物を見落としてしまう。モンテッソーリ教育においては、創設当初の「子どもの家」が担った役割等を背景とし、愛情と注意が子どもの成長に必要不可欠なものとして位置づけられ、「精神的環境」としての教師、その教師による個々の子どもの要求の把握ときめ細やかな目配りが子どもの自己活動、「自由の原理」を支えていた［cf. Montessori 1909: 37–50＝1912: 48–71］。しかし、キルパトリックの検討の中にそうした要素への言及は見受けられない。

おわりに

キルパトリックによる批判からほどなくして、1915年をピークにモンテッソーリ教育に関する記事・論文の数は減少していった。その原因は、これまで言及されてきたように、キルパトリックによる批判、当時アメリカの教育界で隆盛していた進歩主義教育者との見解の相違、モンテッソーリ教育内部での問題［cf. Kramer 1978（1976）］、そして本論文で着目してきたモンテッソーリのテキストそのものの質的変化によるもの、そうした諸問題の絡み合いによって生じていたと考えられる。英語版『モンテッソーリ・メソッド』（*The Montessori Method*）における様々な変化は、単なる「翻訳書」という役割を超え、そのタイトルが象徴的に示していたよ

うに〈(打ち立てられた)モンテッソーリの教育法〉としてモンテッソーリ教育をアメリカに広く紹介する役割を担った。イタリアにおいてはじめて書かれた当初、「この不完全な覚え書きのささやかなねらいは、ある実験の諸結果を述べることである」[Montessori 1909: 5＝1912: 1]とされていた彼女の一つの「覚え書き」は、1912年の英語版の出版によって新たにアメリカという地で「モンテッソーリ・メソッド」として生まれ変わる日を迎えたのである。

その著作では、これまで経験的に習得され実践されていた教具の段階的提示や、人々の関心を集めた自由から生じる「規律」が、モンテッソーリの手によって体系立てて詳細に説明され、それは広くアメリカの読者にモンテッソーリ教育の概要を知らせ、アメリカにおける教育実践および教育研究を活性化させる契機を提供した。一方で、分かりやすく、実際的適用を可能なものとする詳細が示された章の追加、英語版への前書きや本文中に示されたエール[13)]、アメリカで当時行われていたフレーベルの教育とモンテッソーリの教育との組み合わせを模索するホームズによる序文は、モンテッソーリ教育の中から「メソッド」の有用性や適用可能性を読み取ろうとする人々の関心も喚起した。その過程においては、互いのバランスをとりながら接合の方途を摸索する取り組みが展開される場合もあれば、しばしばその教育が生み出された背景と教育法とのつながりや「有用」とみなされない部分を捨去する傾向がみられた。この問題は、「有用性」や「適用可能性」に強く焦点を当てて特定の教育を分析することは、教育風土や時代状況、教育観の違い等に左右され、「無用」「適用不可能」との判断で、その全体像の把握を知らず知らずのうちに拒否してしまうことにつながりうるという、一つの傾向をわれわれに知らせている。

1910年代アメリカにおけるモンテッソーリ教育受容の歴史は、モンテッソーリ教育を受容しようとした人々と、モンテッソーリ(教育)自身との呼応の歴史でもあった。その過程では英語版のタイトルと相まってメソッドへの注目が高まったが、モンテッソーリ教育には、メソッドの問題に回収されない哲学的な問題が存している。例えば、モンテッソーリ教育を根幹から支えているひとつの原理――「すべての自然の秘密は幼児の魂の中に在る」[Montessori 1909: 280＝1912: 377]を今一度思い起こすならば、それは1909年のイタリア語版刊行以来、その後のモンテッソーリ教育にも通底してみられる重要な概念である。1909年に刊行された『子どもの家の教育に適用された科学的教育学の方法』は、加筆・修正を加え、41年の年月を経て『子どもの発見』(*La Scoperta del Bambino*, 1950)として刊行される。そこでのタイトルの変更は、自らの教育が目の前の子どもの「生」の様態との対話から導かれたものであるという、モンテッソーリ自身によるモンテッソーリ教育の原点の再確認でもあった。また、『子どもの発見』の刊行からしばらくして、アメリカにおいて第2次モンテッソーリ教育運動が興隆することとなる。モンテッソーリ教育はなぜ再び人々の関心を呼び起こしたのだろうか。1950年刊行の『子どもの発見』に至るモンテッソーリ教育の変遷、第2次モンテッソーリ教育運動についての考察は別稿に譲りたい。

13) 英語版への前書きは、次の言葉で締めくくられている。「私の教育方法がアメリカとイギリスの子ども達に影響を与えることが、私の深謝の気持ちの表れとなることを願ってやみません」[Montessori 1912: viii]。

引用文献

Appelbaum, P. 1971: *The Growth of the Montessori Movement in the United States 1909-1970*, University Microfilms International.

Beineke, J. A. 1998: *And There Were Giants in the Land: The Life of William Heard Kilpatrick*, Peter Lang.

Berle, A. A. 1913: The Montessori Method and the Home, in: *Journal of Education*, 77(18), pp. 484-486.

Campbell, D. N. 1970: *A Critical Analysis of William Heard Kilpatrick's the Montessori System Examined*, University Microfilms International.

Fugina, S. M. L. 1963: *Origins and Current Status of the Montessori Movement in the United States*, University Microfilms International.

Gutek, G. L., Gutek P. A. 2016: *Bringing Montessori to America: S. S. McClure, Maria Montessori, and the Campaign to Publicize Montessori Education*, The University of Alabama Press.

Hailmann, W. N. 1912: The Montessori Method and the Kindergarten, in: *Kindergarten-Primary Magazine*, 25(1), pp. 6-7.

Hainstock, E. G. 1978: *The Essential Montessori*, New American Library.

Holmes, H. W. 1912: Introduction, in *The Montessori Method*, tr. by Anne E. George, Frederick A. Stokes Company, pp. xvii-xlii.

Kilpatrick, W. H. 1912a: *Kilpatrick's Diaries*, Gottesman Libraries at Teachers College, (dated) April 7.

——————— 1912b: *Kilpatrick's Diaries*, Gottesman Libraries at Teachers College, (dated) June 12.

——————— 1913: Montessori and Froebel, in: *Kindergarten Review*, 23(8), pp. 491-496.

——————— 1914: *The Montessori System Examined*, Houghton Mifflin Company.

Kramer, R. 1978(1976): *Maria Montessori: a Biography*, Oxford: Basil Blackwell.

Lillard, P. P. 1972: *Montessori: a Modern Approach*, Shocken Books.

Merrill, J. B. 1909: A New Method in Infant Education, in: *The Kindergarten-Primary Magazine*, 23(4), pp. 106-107.

Montessori, M. 1909: *Il metodo della pedagogia scientifica applicato all'educazione infantile nelle case dei bambini*, Max Bretschneider.=1912: *The Montessori Method*, tr. by Anne E. George, Frederick A. Stokes Company.=1974:『モンテッソーリ・メソッド』阿部真美子・白川蓉子訳、明治図書。

——————— 1914: *Dr. Montessori's Own Handbook*, Frederick A. Stokes Company.

——————— 1966(1950): *La Scoperta del Bambino*, Garzanti.

New York Times 1913: Dr. Montessori's Aim.: She Tells Great Audience That She Seeks Perfection of the Race, (dated) December 9.

Suzzallo, H. 1914: Editor's Introduction, in: *The Montessori System Examined*, Houghton Mifflin Company, pp. vii-ix.

杉浦英樹 2002:「プロジェクト法の源流(3) キルパトリックのモンテッソーリ批判」『上越教育大学研究紀要』22(1)、133-157頁。

Tozier, J. 1911: An Educational Wonder-Worker: The Methods of Maria Montessori, in: *McClure's Magazine*, 37(1), pp. 3-19.

Ward, F. E. 1913: *The Montessori Method and the American School*, The Macmillan Company.

Wills, M. L. K. 1966: *Conditions Associated with the Rise and Decline of the Montessori Method of Kindergarten-Nursery Education in the United States from 1911-1921*, University Microfilms International.

山内紀幸 2002:「第一次モンテッソーリ運動に関する思想史的考察―キルパトリック批判が衰退の主要因なのか―」『幼児教育学研究』第9号、1-9頁。

[付記] 本稿は、令和3年度奈良女子大学文学部プロジェクト経費（区分A）による研究成果の一部である。

（原稿受理日　2022年3月13日）